

柳宗悦と民芸運動：現代への思想（特集 高校の教科書に出てくる 日本仏教と日本の思想）

著者	笹原 亮二
雑誌名	大法輪
巻	77
号	9
ページ	119-119
発行年	2010-09-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/4915

柳宗悦と

民芸運動

◆民芸の発見

「民芸」は、大正末期に柳宗悦が生みだした造語である。柳は、民衆が日々の生活で用いる雑器類にも美が存在することを発見し、それを「民芸」と呼んで、その普及と創造に向けて様々な活動を繰り広げた。

柳は民芸を、民衆の普段使いの工芸品と規定する。それらは「粗末なもの、下等なものという聯想」から「つまらぬもの、やくざなもの」として、従来「工芸史の中に正統な位置を有」たなかった。しかし、「工芸が実用を生命とする」ならば、民芸こそが「工芸中の工芸」であり、民芸にこそ「工芸美」が存在するこ

とになる（柳「民藝とは何か」）。

柳によれば、工芸には一般向けの民衆的工芸と富裕層向けの貴族的工芸があるという。前者が実用性第一で無名の職人の安価な大量生産品なのにに対し、後者は鑑賞第一で芸術家の高価な一点物の美術品となる。何れも美は存在するが、前者の民衆的工芸、即ち民芸の方が価値が高い。というのも、「実用を生命」とする

工芸は、その美も生活に密着した「用の美」となり、それは民芸にこそ備わる。貴族的工芸の美は、芸術家が鑑賞者の目を意識し技巧を尽くした作為的な「誤れる美」である。それに対して民芸は、職人が実用を旨に無心で作った分、素朴で純粹で健康な「正しい美」となる。

こうした柳の民芸の主張は、明治以来の西欧文化中心の近代化に抗し、日本の伝統の再認識を目指す精

神的な運動の性格も有していた。

◆民芸の実践

柳の民芸は、実際に民芸を製作して人々の実用に供し、美に満ちた生活の実現を目指す実践運動でもあった。製作の手本を取めた日本民芸館の設立や、職人の協働による製作を旨とした民芸協団の組織はその一環であった。しかしその実践は、製品の価格高騰で職人が作家化したり、協団が諸般の事情で早々に解散したり、順調とはいかなかった。実践運動に関わる職人を初め多くの人々の共通理解となるには、柳の主張は理想的に過ぎたのかも知れない。

とはいえ、日本民芸館が今も多くの人々の来館者を集める事実は、柳の民芸が「宗悦好み」の美の世界として、多くの人々の支持を得てきたことを示している。

(笹原)